

【訳者注】 *The 9/11 Reader : The September 11, 2001 Attacks* (ed. Michel Chossudovsky) は、Global Research がこの問題について、このサイトに載せられたこれまでの論文や分析研究を、テーマごとに章に分けて特集した選集だが、ここには、その序文だけを翻訳して掲載する。これだけで——特にこの事件の真相をいまだに知らない多くの日本人には——事件の大まかな理解には十分であろう。

「～Reader」というのは作家や思想家が亡くなり、「棺を覆うて声価定まった」ときに出す解説付きの選集のことだから、この場合、13年経って「9・11 テロ」の真相と見方が、疑いの余地なく固まってきたという判断によるものである。この決定的事件を正しく把握していなければ、今日、世界で起こっている重要な出来事は何ひとつ理解できないことが、わかってくるであろう。

9・11 リーダー（序文）

2001年9月11日の悲劇的な事件は、アメリカ史の基本的なランドマークとなった出来事、決定的な分水嶺、分かれのポイントになったものである。何百万という人々が、9・11の原因と結果について間違った理解をさせられてきた。

2001年9月11日は、世界の地殻変動、アメリカ社会の軍国主義化など、危機の時代の発端となった。

アメリカ軍の軍事ドクトリン（教条）の徹底検証が、9・11に続いて展開された。

“反テロリズム”という人道的な衣に隠れた果てしない侵略戦争が、そこから動き出した。

9・11はまた、市民的自由の情け容赦ない撤回、法執行の軍隊化、“警察国家アメリカ”の始まりへの踏み石ともなった。

2001年9月11日はまた、アメリカとNATOの連盟が“国境なき戦争”、地球的征服の戦争を行うことの口実と正当化としての、“テロに対する地球的戦争”の始まりを画するものであった。

9月11日午前11時に、ブッシュ政権は早くも、世界貿易センター（WTC）とペンタゴン（米国防省）を攻撃したのは、アルカーイダだと宣言した。この主張は警察による真相調査に先んじて行われた。

CIA 局長 George Tenet は、その同じ朝に、オサマ・ビンラディンは“ほとんど警告なしに多重攻撃”を計画する能力をもっていると声明した。

国務長官コリン・パウエルは、この攻撃を“戦争行為”と呼び、ブッシュ大統領は夕方の国民向けのテレビ演説で、「私は、これらの行為を働いたテロリストと、彼らをかかまう者の間に区別をつけるつもりはない」声明した。

元 CIA 局長 James Woolsey は、アフガニスタンを名指すことなく、“国家による援助”を指摘し、1 つあるいはそれ以上の外国政府の共謀を匂わせた。元国家安全アドバイザー Lawrence Eagleburger は、「我々は、こんな風に攻撃されたときには、我々の力と復讐は恐ろしいことを示すつもりだ」と言った。

その同じ夕方 9 時半には、トップの情報部メンバーと軍アドバイザーによる“戦争内閣”が組織された。そして午後 11 時には、その歴史的なホワイトハウスでの会合が終わるとともに、“テロリズムへの戦い”が公式に打ち出された。

9・11 という悲劇的な出来事は、“人道的根拠に基づいて”アフガニスタンへの戦争を仕掛けるための、要求される正当性を与え、それは世界の世論と“国際共同体”の承認の十分なサポートを得たものだった。何人かの著名な“進歩的”知識人が、道徳的倫理的な根拠によって“テロリズムに対する報復”の正当性を唱えた。戦争の正当性というドクトリンが、9.11 への合法的な反応として受け入れられ、額面通りに支持された。

9.11 のあとでは、反戦運動は完全に孤立した。労働組合や市民社会組織は、メディアの嘘と政府のプロパガンダを鵜呑みにしていた。彼らは、中央アジアの人口 3 千万の貧乏国アフガニスタンに対する復讐戦争を受け入れていた。

“外部の敵”という神話と“イスラム・テロリスト”の脅威が、ブッシュ政権の軍事ドクトリンの礎石であり、これが、アメリカの市民的自由と合憲的政府の棚上げは言うに及ばず、アフガニスタンとイラクを侵略する口実に使われた。

十分に記録されているが、主流メディアはあまり使わなかった「アルカーイダ」という言葉は、ソ連 - アフガン戦争時代にまで遡って CIA の作り出したものである。これはよく知られた事実で、米議会の公的記録を含む多くの資料によって傍証されるが、主流メディアは退けるか無視した言葉である。諜報共同体は折に触れて、彼らは実はオサマ・ビンラディンを支持していたのだが、冷戦が終わると共に、「彼は我々に対して寝返った」のだと言っていた。

9・11 調査委員会報告は、これまでずっと“外部の敵”神話を掲げており、アルカーイダが9・11 攻撃の背後にある“首謀者”組織だと言いつけている。

公的な9・11 物語は、世界貿易センター（WTC）の建物の崩壊の元となる原因を捻じ曲げてきただけではない。それはまた、国際的なテロをアメリカが密かに支持してきた歴史記録を消し去り、一方で、アメリカと“西洋文明”が脅威にさらされているという幻想を作りあげてきた。

“外なる敵”がなければ、“テロに対する戦争”もありえない。国家的安全保障計画の全体がトランプの城のように崩れるだろう。高位にある戦争犯罪人たちは足場を失うだろう。

9・11 後、メディアの偽情報作戦は、真理を見えなくしただけでなく、いかに、この幻想の“外なる敵”アルカーイダがでっち上げられ“敵ナンバーワン”に仕立て上げられたかの、歴史的証拠の多くを隠滅することに、それは寄与してきた。

クリックしてビデオを見ていただきたい――

<http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=26450>

Special GRTV Feature Production

By James Corbett—2011-09-08

この「9・11 リーダー」は、過去11年間に Global Research によって公表された鍵となる論文を、注意深く集めて構成したものである。

9・11 は Global Research にとって重要な画期的事件であった。我々のこのウェブサイトは、9・11 の2日前、2001年9月9日に出発したものである。我々の9・11 事件取材は2001年9月12日に始まっている。

これら70点以上からなる論文集の中には、この攻撃の直後に Global Research によって発表された、我々のアーカイブズからの重要ないくつかの報告が含まれている。これらの論文記事が提供しているのは、9・11 タイムラインに関する諸問題の集約点、9・11 攻撃が前もって知られていたこと、ペンタゴンへの攻撃、9・11 に先立つ何日かのウォール街でのインサイダー取引（したがって予め知られていた）の諸問題などである。

ここに支配的なのは、9・11 悲劇のさまざまな次元に属する嘘とねつ造の、複雑な絡み合い

である。公的 9・11 物語に含まれている虚偽は多層的で、オサマ・ビンラディンが首謀者であるという確認から、米国立標準技術研究所（NIST）による WTC の建物は火災の影響によって崩壊したという主張（PartⅢ参照）まで範囲が広い。

オサマ・ビンラディンは 2001 年 9 月 11 日にどこにいたか？

この恐ろしい男オサマ・ビンラディンが、公的 9・11 物語が主張するように 9・11 攻撃を指揮したという、何か証拠があるのだろうか？

CBS ニュース（Dan Rather , January 28, 2002）によれば、

<http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=3194>

“敵ナンバーワン” は、2001 年 9 月 10 日には、間違いなくアメリカの同盟国であるパキスタンの教示によって、Rawalpindi にあるパキスタン陸軍病院の泌尿器科に入院していたことがわかった。彼は簡単な通知で逮捕できたはずで、「大いに手間が省けた」であろう。しかしそうなれば我々は、過去 11 年間、大統領の演説やニュースの種になり続けた、オサマ伝説をもつことはなかったであろう。

Dan Rather : 「今アメリカとその同盟国が、テロに対する戦争で、オサマ・ビンラディン狩りを続けていますが、我々 CBS ニュースは、今夜、ビンラディンの部下たちが 9 月 11 日にアメリカを攻撃する前の数時間、彼がどこにいたか、そして何をしていたかについて、独占的情報を得ています。

これは、CBS ニュース記者チームと、この方面の最上の海外特派員の一人 CBS の Barry Petersen による、執拗な調査報告からわかってきたことです——」

<http://www.youtube.com/watch?v=dUj2905unnw>

（ビデオテープの初め）バリー・ピーターセン CBS 特派員：「9 月 11 日に起こったことは誰でも覚えています。今から紹介するのは、その前の晩に起こったかもしれない話です。それはオサマ・ビンラディン狩りほどに捻じ曲がった話です。

CBS ニュースは、9 月 11 日のテロ攻撃の前の晩、オサマ・ビンラディンは、パキスタンにいたという情報を手に入れました。彼は軍隊の庇護のもとに治療を受けていましたが、その軍隊は数日後、米軍のアフガニスタンにおけるテロとの戦争を支援するという約束をしています。」

CBS 報道の書き写しは次の通り——

<http://www.globalresearch.ca/articles/CBS203A.html>

これもお覧ください——

<http://www.cbsnews.com/stories/2002/01/28/eveningnews/main325887.shtml>

CBS ニュースの映写フィルム——パキスタン、ラワルピンディの病院、ここでビンラディンは 9・11 の前日、治療を受けていたと言われる。

この上なく重要なこの CBS 報告は、2つの明らかな事実を指し示している——

1. オサマ・ビンラディンが、病院のベッドから 9・11 攻撃を指揮したとは考えられない。
2. この病院は、ペンタゴンと親密につながるパキスタン軍の管轄下にあった。オサマ・ビンラディンの所在は、パキスタン軍にも米軍にも知られていた。

ラワルピンディに駐留する米軍と米情報アドバイザーは、パキスタンの同じ職務の人たちと連携して仕事をしてきた。それでも、アメリカの最大の逃亡者を逮捕しようとする試みはなされなかった。国務長官ダニエル・ラムズフェルドは、当時、オサマ・ビンラディンの所在は分からないと言い、彼自身の言葉で「それは乾草の山の 1 本の針を探すようなものだ」と言った。

2001 年 10 月 7 日：アメリカのアフガニスタンに対する 9・11 報復戦争

アメリカとその同盟国の、9・11 攻撃に対する直ちに起った反応は、タリバン政府が“恐怖の首謀者”ビンラディンを保護しているという名目で、アフガニスタンへの報復戦争を布告することだった。タリバンは、ビンラディンを匿っていると想定され、アメリカ政府と NATO によれば、アメリカに対する戦争行為の共謀者だった。

公的な声明をそのまま繰り返す 2001 年 9 月 12 日の西側のメディアは、アフガニスタンの市民を標的とする“懲罰行動”を行うことを、すでに認めていた。ニューヨーク・タイムズの記者 William Safire の言葉によれば——「根拠があって攻撃者の基地やキャンプを見定めた上は、我々はこれを粉砕しなければならない。派生的ダメージは抑えるとしても、これを受け入れながら、恐怖をもたらす者たちを公然とまた隠然と不安定化する必要がある。」

この決定は 2001 年 9 月 11 日夕刻、ブッシュ - チェイニー戦争内閣によって下された。それはアルカーイダが背後にいるという、CIA 首脳によって“確認された”想定に基づくものだった。

翌朝、2001 年 9 月 12 日、NATO の大西洋評議会はブリュッセルで会合し、ワシントン条約の第 5 条を引用して、ブッシュ政権のアフガニスタンへの宣戦布告を承認した。

外国（アフガニスタン）の大西洋同盟構成員（アメリカ）への戦争行為は、NATO の集団安全保障教条の元で、全構成員に対する戦争行為になる。どんなに想像力を働かせても、世界貿易センターとペンタゴンへの攻撃を、外国による戦争行為と位置付けることはできない。しかし誰もこの問題を取り上げた者はいないらしい。

一方、2001 年 9 月中に 2 度に及んで、アフガン政府は——外交筋を通じて——オサマ・ビンラディンを米法廷に引き渡すことを申し出た。これらの申し出は、アメリカは「テロリストと交渉はしない」という理由で、ブッシュ大統領によって拒否された。

アフガニスタンへの戦争は、26 日後の 2001 年 10 月 7 日朝、実行動に入った。この戦争のタイミングには首をかしげる。数千マイルも離れた大舞台戦争を計画して実行しようとするれば、どれだけの時間がかかるだろうか？ 軍事アナリストなら、大舞台戦争のためには、数か月か、1 年ないしそれ以上の準備が必要だと言うだろう。アフガニスタンに対する戦争は 2001 年 9 月 11 日より前から、かなり準備が進んでいた。これは 9・11 攻撃を予め知っていたという妙なことになる。

アメリカにおける市民的自由の撤回は、アフガニスタンへの爆撃と侵略が始まるのと並行して進められた。そして 9・11 とほとんど同時に、米人を保護するという口実で、「愛国者法」が法制化され、「祖国安全保障」の道具立てが準備された。9・11 後の法的・制度的枠組みは、9・11 攻撃より前に注意深く計画されていた。

アルカーイダは米情報部の一つの作品

9・11 を理解するのに重要なことは、米情報部が、ソ連 - アフガン戦争の盛んだった時代に遡って、“イスラム・テロリズム”の隠れた作者だったことである。

ビンラディンは当時 22 歳で、CIA 援助によるゲリラ訓練キャンプで訓練を受けていた。ソ連 - アフガン戦争前の数年のアフガニスタンでの教育は、あらかじめ世俗的なものであった。それがネブラスカで作られた宗教的教科書によって、CIA スポンサーによる宗教学校

(madrasah) の数は、1980 年には、2,500 から 39,000 に増えた。

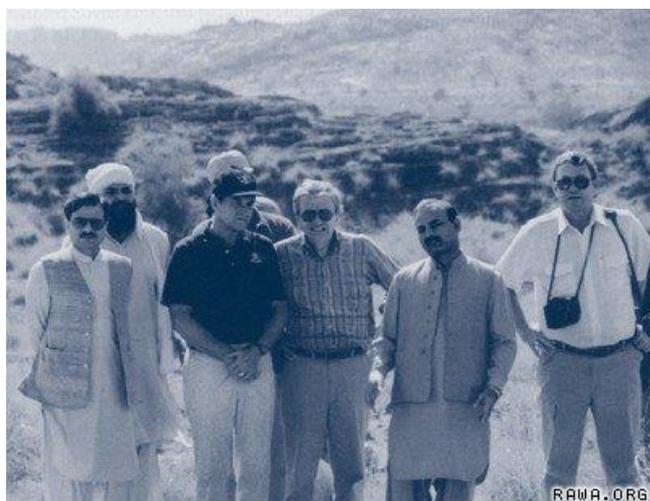
「CIA の資金による広告が、世界中の新聞やニュース・レターに載せられ、人々はジハード（イスラム聖戦）に参加するように仕向けられ、動機づけられた。」（Pervez Hoodbhoy, Peace Research, 1 May, 2005）

「アメリカは、アフガンの学童たちに、暴力的な写真や好戦的なイスラムの教えをいっぱい載せた教科書を与えるのに、数百万ドルを使った。…ジハードの話や、銃、弾丸、兵士や地雷の絵をふんだんに使った教科書は、その後、アフガンの学校制度のカリキュラムの中心として役立った。タリバンでさえアメリカ製の本を使用した。」
(Washington Post, 23 March, 2002)

レーガン政権の下で、米海外政策は、イスラム“自由戦士”の無条件の支援と承認に向かって進展した。この承認は今日まで全く修正されていない。

ひねくれた皮肉な話だが、9・11 後の時代を通じて、アメリカの情報部は、イギリスの M16 やイスラエルのモサドと結託して、9・11 攻撃を行ったとされている過激イスラム主義組織を、ひそかに支援し続けている。アルカーイダとその同盟グループ——リビア・イスラム戦闘グループ (LIFG) や自由シリア軍 (FSA) 内部の分派など——は、アメリカと NATO によって直接支援されている。

ひどく皮肉なことに、アメリカとその同盟国は、9・11 を起こしたという者たちに対して“テロに対する戦い”を行っていると言っているのだが、一方では、アルカーイダの戦闘部隊を彼らの歩兵として使っている。



前列左から、パキスタンの ISI（相互情報部）長官 Hamid Gul 陸軍少将、米 CIA 局長 William Webster、米作戦部副長官 Clair George、ISI 大佐、シニア CIA 職員 Milt Bearden——1987 年、パキスタン北西戦線地域のムジャヒディーン訓練キャンプにて。



ロナルド・レーガン大統領が、1985 年、ホワイトハウスで、アフガンのムジャヒディーン司令官らと面談している。（Reagan Archives）

<http://www.reagan.utexas.edu/archives/photographs/atwork.html>

世界貿易センター・ビルの倒壊

「9・11 真相のための建築家と技術者」グループの Richard Gage の所見によれば、世界貿易センター・ビルの倒壊は、飛行機の衝突による火災によって起こったものではない：——

100 以上のスチール骨格の高層ビルの火災（その多くは、非常に高温で、非常に大きく、非常に長時間続いた）のうち、倒壊した例は過去に 1 つもない。だから、政府方の NIST（米国立標準技術研究所）の火災専門部前主任の James Quintiere 博士が言った通り、「これらの倒壊の原因であった可能性のある真の代替案を調べる」ことが我々の義務であろう。

まず温度から始めよう。華氏 1,340 度 (727°C) という温度が、9・11 から 1 週間後に、NASA の AVIRIS 装置によって、WTC の瓦礫の山の表面温度として記録されている。これほどの温度は、酸素が欠乏した炭化水素の火災によっては得られない。そのような火災は華氏 600 から 800 度 (316~427°C) 程度で燃える。この瓦礫の山のてっぺんに火はなかったことを忘れないでほしい。この信じられない熱の発生源は、したがって、

瓦礫の表面の下で、そこは 1,340 度よりはるかに高かったに違いない。

ビルディング 7 の後の清掃を依頼された解体業社長の **Mark Loizeaux** は、「溶けた鉄鋼が WTC 第 7 ビルに発見された」と言った。WTC 構造の設計技師だった **Leslie Robertson** は、10 月 5 日、「攻撃から 21 日後に、まだ火が燃えており、溶けた鉄鋼がいまだに流れていた」と明言した。ビデオで話した消防署の職員は、「溶けた鉄鋼が溝のレールを流れ落ちており、鋳物工場のような、火山から流れる溶岩のような感じだった」と報告した。ブロンクスの消防士 **Joe O'Toole** は、クレーン車がスチールの梁を瓦礫の中から垂直に引き上げるのを見ていた。彼は「溶けたスチールが滴り落ちていた」と言った。「瓦礫から遺物を取り出す」仕事を依頼された建築家 **Bart Voorsanger** は、恐ろしい重量の「隕石のようなもの」について、それは「溶けたスチールとコンクリートの融合した物質」だったと言った。

スチールは大体、華氏 2,850 度 (1,566°C) で溶ける。これは WTC タワー 1 と 2 の火災の、NIST による推定温度の約 2 倍である。とすると何がスチールを溶かしたのか？

FEMA の BPAT 報告の付録 C の記録は、スチールのサンプルが急速に酸化し、硫化し、相互粒状化することを示している。出所のわからない硫黄を含め、ある液状の共晶混合物が、スチールの強烈な腐食を引き起こし、フランジ（つば）の広い梁に穴をあけ、厚さ半インチのフランジを、ほとんど剃刀のような薄さにするということが、WTC 第 7 ビルでは起こった。ニューヨーク・タイムズはこれを「調査において明らかにされていない最も深い謎」と呼んだ。

NIST は、この決定的に重要な法廷的証拠のすべてを報告から省いた。なぜか？ それは公的な陰謀論と合わなかったからである。

昨年、物理学者 **Steven Jones** と別の 2 人の物理学者、それに一人の地質学者が、梁の端についているスラグ（溶けかす）や、溶けて固まった金属のサンプルを分析した。検出されたのは、鉄、アルミ、硫黄、マンガン、それにフッ素だった。これらは火力兵器であることの化学的証拠で、それは、熱いナイフがバターを切るように鉄鋼を切る、ハイテクの鋭い火器であり、この爆発物の反動の副産物は溶けた鉄である！ 溶けた鉄の考え得るあらゆる原因として、これ以外には見出されなかった。この火力兵器の重要な構成物の一つは硫黄であり、これは FEMA が発見した液状共晶混合物を形成するもので、鉄鋼の融点を下げる作用がある。

その上、世界貿易センター第 7 ビルの破局的な構造的崩壊は、爆発物によるコントロー

ルされた解体の、あらゆる特徴を示している。その破壊は突然、ビルの基底部から始まった。いくつかの最初の反応装置が、倒壊の約1秒前に爆発が起こるのを報告した。前後左右均整の取れた、自由落下に近い倒壊が起こった。それは重さに耐えられるように設計された4万トンのスチールによる最大級の抵抗を突破して、まっすぐにそれ自身の足元へと落下した。これはすべての柱が、相互に何分の1秒か以内に崩れることを要求する——中心柱も周囲の柱も同時に。ネットによる倒壊のビデオ記録を見ると、7階上部に時間を間違えて爆発したらしい様子もうかがえる。そして、ヨーロッパの解体専門家 Danny Jowenko による証言がある——「これはコントロールされた解体です。専門家チームがやったもので、疑いの余地なくプロの仕事です。」

火事によってこういう結果は生まれない。火事の場合は、大きな、ゆっくりした変形と均整を乱した倒壊が生ずる。火力兵器の場合は、直線的にすべてを結んでこれを使えば、こうした効果が得られる。もし火力兵器が、ロスアラモス国立研究所で開発されたように、非常に細かい粒子に形成されるならば、それは超火力兵器と呼ばれ、大きな爆発力がある。(Richard Gage, January 2008)

<http://globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=8472>

次の AE911Truth ビデオは、WTC センターのタワーがコントロールされた解体によって倒壊したことを示す、反論できない証拠になっている。

David Ray Griffin はこう言っている——「倒壊の公的な説明は本質的に火災説だが、いくら強調しても強調しきれないことは、火災は大きなスチール骨格ビルを倒壊させることは絶対になく、9・11の前にもなく、後にもなく、9・11のニューヨークを除いて、世界中のどこにもないということだ。」

<http://globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=21436>

「9・11 真相のための建築家・技術者」グループによれば、確実な科学的分析と証拠に基づいて、WTC タワーの倒壊はコントロールされた、意図されたものである。AE911Truth は、WTC ビル倒壊の陰謀に誰が関わっているのかについて推測していないが、彼らは、このような作業を実行するには、爆薬の使い方の高度に専門的な知識をもつだけでなく、このビルを予めよく知る者が注意深く計画したものでなければならないと言っている。

WTC ビルディング7の倒壊

最もグロテスクな嘘は、9月11日午後の、WTC ビルディング7（ソロモン・ビルディング）が倒壊したという BBC と CNN の放送である。BBC の放送は、倒壊が現実にかかる

21 分前、5.00pm にライブで行われ、WTC 7 の倒壊を予め知っていたことが間違いなく明らかになった。また CNN ニュースキャスターの Aaron Brown は、このビルが「すでに倒壊したか倒壊しつつある」ことを、事件の 1 時間前に放送した。

<http://www.wtc7.net/foreknowledge.html>



隠ぺいと共謀

「9・11 リーダー」は、アメリカの最も高い政府レベルでの隠ぺいと共謀を示す、事実情報と分析を提供するものである。

著名な著者、学者、建築家、技術者らによる論文群は、9・11 調査委員会報告（Part IVで批判されている）の公的物語をあら

かた退けている。それらは、アメリカが 9 月 11 日にオサマ・ビンラディンの命令で攻撃されたという考えを一蹴している。

これが問題の核心である理由は、9・11 以来の米軍ドクトリン（信条）が、“祖国アメリカ”をイスラムのテロリストから守り、アルカーイダやその“国家スポンサー”に先制攻撃を仕掛けることを前提としてきたからである。アフガニスタンは、“テロに対する戦争”の一部として爆撃され侵略された。2003 年 3 月には、イラクもまた侵略された。

戦争プロパガンダ

フィクションは現実を打ち負かす。プロパガンダが効果的であるためには、アルカーイダが

あの攻撃の背後にあったという 9・11 の公的物語を、世論が確実に承認しなければならぬ。うまく組織されたメディアの偽情報 (Part XI) が、この目標を達成するのに要求される。9・11 を伝説として根付かせるためにはまた、「9・11 真相運動」に挑戦し、これに泥を塗ることが要求される。

9・11 後の時代を通じて、さまざまなアルカーイダに関する出来事や事情が、ほとんど毎日のように、世論に対して提供された。テロの脅迫、警告と攻撃、警察による調査、反乱と逆反乱、国家レベルの体制転換、社会紛争、派閥暴力、人種差別、宗教分裂、イスラム思想、西洋的価値、等々。

一方で、9・11、アルカーイダ、“テロに対する戦い” というレトリックが、政府のあらゆるレベルの政治的言説に浸透し、米連邦議会の与野党論戦において、米上下院の委員会において、英国下院において、そして忘れてならないが、国連安全保障理事会において議論された。

9月11日とアルカーイダの概念が、胸が悪くなるほど繰り返され、人々の心に潜在的なトラウマ的影響を及ぼし、通常の間人が、戦争や政治や経済危機の“本当の外なる世界”を分析し理解する能力に影響を与えている。

危機に直面しているのは、概念と事実に根拠をおく人間の意識と理解力である。

9月11日に関しては、確かめ得る“事実”も“概念”も存在しない。なぜなら9・11もアルカーイダもすべて、メディアの神話、一つの伝説、発明されたイデオロギー構造物へと進化し、メディアの偽情報と戦争プロパガンダの、厚かましい道具として使われているからである。

アルカーイダは、テロリズムの様式化されたニセモノの、ほとんど民話のような抽象概念になり、世界中の何百万という人々の内なる意識に浸透している。

アルカーイダへの言及は、ドグマとなり、信仰となり、ほとんどの人がこれを無条件に受け入れるようになった。

これは政治的な吹込みなのか？ 洗脳なのか？ もしそうなら、その根底にどんな目的があるのか？

人々の、世界の出来事を自分で分析する能力、政治や社会に属する因果関係に取り組もうとする能力が、著しく損なわれている。それこそが目的なのだ！

9・11 やアルカーイダを、複雑な政治的出来事を一律に説明するのに用いることには、混乱を作り出そうとする意図がある。それは人々を考えさせないようにする。

こうした複雑な、アルカーイダに関係する出来事すべては、政治家や、企業メディアや、ハリウッドや、ワシントンのシンクタンクによって、一遍一律の“悪い奴ら”という項目で説明される。そこでは「アルカーイダ」は、世界中の無数の恐ろしい出来事の唯一の原因として、何気なく繰り返し指摘される。

9・11 攻撃におけるイラクの役割とされるもの

9・11 神話は戦争プロパガンダの支柱となってきた。2002 年から 2003 年 3 月のイラク侵略に至る期間に、“オサマ・ビンラディン”と“大量破壊兵器”といった言説が、ニュース・チェーンの中を盛んに駆け巡った。ワシントンの公的立場は、サダム・フセインは 9・11 の背後にはいなかったというものだったものの、大統領演説や西側メディアには、それらしい言い方がよく見られた。2002 年 10 月の記者会見でブッシュはこう言った――

脅威はイラクからやってきます。それはイラク政権自身の行動――その侵略の歴史、その恒常的なテロ――から直接生ずるものです。…我々はまた最近の歴史の最も生々しい出来事を忘れてはなりません。2001 年 9 月 11 日、アメリカは攻撃に対する弱さを露呈しました――地球の反対側に生じた脅威に対してさえそうでした。我々はそのとき決意しました、今も決意しています――その出所はどこであろうと、突然の恐怖と苦しみをアメリカにもたらす可能性のある、すべての脅威に立ち向かう決意です。

<http://georgewbush->

whitehouse.archives.gov/news/releases/2002/10/print/20021007-8.html

イラク侵攻のわずか 2 週間前に、9・11 がブッシュの口から盛んに飛び出した。3 月の侵攻に至るまでの数週間、アメリカ人の 45% が、サダム・フセインが 9・11 攻撃に“個人的に関わっている”と信じていた。

<http://www.csmonitor.com/2003/0314/p02s01-woiq.html>

そうこうしているうちに、新しいテロリストの首謀者が浮上してきた――Abu Musab Al-Zarqawi だった。

2003 年 2 月のコリン・パウエルの国連安保理事会での歴史的な演説で、サダム・フセインとアル・ザルカウイとの不吉な関係に関する詳しい“記録文書”が提出されたが、これは彼

が恐ろしい、化学、生物、核兵器を作る能力をもっていて、世俗的なバース党政権の支持と承認を十分に得ているという内容だった。完全にでっち上げだったコリン・パウエルの主張がほのめかしていたのは、フセインとあるアルカーイダ寄りの組織が、手を組んで北部イラクで大量破壊兵器の製造に携わっていて、フセイン政府がテロの“国家スポンサー”だというものだった。



この偽情報キャンペーンの趣旨は、2003年3月の米主導のイラク侵略の後までずっと浸透して残った。それは、イラクの抵抗運動を“テロリスト”のもののように見せるのが狙いだった。“民主主義に反対するテロリスト”がアメリカの“平和主義者”と戦っているというイメージが、全世界のテレビ・スクリーンと扇情的新聞を通じて広まった。

イラン：9・11の国家スポンサー？

イラク侵略に引き続いて、テロリズムの“国家スポンサー”だという同じ非難が、イランに対しても起こってきた。

2011年12月、イラン・イスラム共和国が、9・11攻撃でアルカーイダを援助する役割をしたとして、マンハッタン裁判所で有罪とされた。

それより前、2004年に、テヘランのその役割とされるものについて調査が始まっていた。これは、「イラン、ヒズボラと9・11ハイジャッカーの間の明らかな繋がりに関して」9・11調査委員会が勧奨した調査だった。9・11委員会の勧奨は、この「明らかな繋がり」は「米政府による更なる調査」を必要とするものだと言っていた。（9・11調査委員会報告、p. 241）

<http://iran911case.com/>

2011年12月法廷判決 (Havlish v. Iran) : —— 「米地方裁判事 George B. Daniels は、イランとヒズボラが、現実的に、直接的に、2001年9月11日の攻撃においてアルカーイダを援助し、この事件の原告である9・11犠牲者の何百という家族への傷害に対し、法的に責任あるものと裁定した。」

[http://information.iran911case.com/Havlish Findings of Fact and Conclusions of Law Signed 12-22-11.pdf](http://information.iran911case.com/Havlish_Findings_of_Fact_and_Conclusions_of_Law_Signed_12-22-11.pdf)

原告代理人によれば、「イラン、ヒズボラ、及びアルカーイダは、1990年代初めにテロ連盟を形成した。我々代理人団は、国家安全保障と情報の専門家を引用して、いかに実践的なテロ指導者たちが、米国（“大サタン”）とイスラエル（“小サタン”）に立ち向かうために、スンニ派とシーア派の分裂を克服したかを説明した。」イランとヒズボラは、「とりわけ、大きなビルを破壊する爆弾の使い方を、アルカーイダのメンバーに訓練した」とされている。

<http://iran911case.com/>

この訴訟審理は、イランを不安定化し、現行の軍事的脅しを正当化するために、もう一つのイスラム国に対して使われる、ねつ造された“テロへの戦争”における、もう一つの悪徳に満ちた武器以外の何ものでもない。それはまた、告訴された者たちについても、訴訟の背後にいる者たちについても、はるかに多くを述べている。イランに不利な証言をした専門家の証人たちは、戦争屋ネオコン・サークルの非常に活動的な人々である。彼らは、21世紀の中東の諸戦争をつくり出した連携した仲間属に属して、その範囲は、非常に名の知れたプロパガンディストから、元米政府官僚を含め、情報部と軍の官僚たちに及んでいる。

しかしこの訴訟を馬鹿々々しいものにしてしているのは、2011年9月、この裁判の数か月前に、9・11の公的物語をずっと疑っているイラン大統領マフムード・アフマディネジャドが、アルカーイダのリーダーによって、「9・11攻撃について陰謀説を広めた」といって非難されたことである。アラビア半島のアルカーイダの半公的メディアは、アルカーイダは、「この攻撃の背後にいたのであって、だからイラン大統領を、テロリスト・グループの名を汚したことで非難したのだ」と主張した。(Julie Levesque, *Iran Accused of being behind 9/11 Attacks. U.S. Court Judgment. December 2011 (Havlish v. Iran)*, Global Research, May 11, 2012) を見よ)

<http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=30777><http://iran911case.com/>

アルカーイダ：米 - NATO の歩兵

皮肉なことに、ワシントンは、イランとアフガニスタンを、テロの支援をしていると非難しているが、歴史記録と証拠は、疑いようもなく、アルカーイダの“国家スポンサー”は、CIA や（英の）M16 や、パキスタン、カタール、サウジアラビアの同類の機関によるものであることを示している。

アルカーイダの暗殺団は、中東や北アフリカで、アメリカが“人道的”戦争を行うために募集されてきた。

シリアでは、アルカーイダ部隊は NATO によって募集されていて、トルコの最高司令部によれば——「我々の情報源によると、ブリュッセルやアンカラで議論されているのは、中東諸国やイスラム教国で何千というイスラム志願兵を募集して、シリアの反乱軍と一緒に戦わせるためのキャンペーンである。」(Debcfile, August 31, 2011)

<http://www.debka.com/article/21255/>

リビアでは、CIA によって訓練されたアフガニスタンのジハーディスト（聖戦士）が送られてきて、“元”リビア・イスラム戦闘グループ（LIFG）司令官 Abdel Hakim Belhadj の指揮下で、“民主主義支持”反乱軍と戦った——

西側の政策立案者たちは、リビアでの NATO の作戦が、アルカーイダの AQIM 分派を大胆にさせるのに重要な役割を果たしたことを認めている。「Fortune 500」の資金による Brookings 研究所の Bruce Riedel は、論文“The New Al Qaeda Menace”（新しいアルカーイダの脅威）で、AQIM は現在、リビアでの NATO の介入のおかげで、軍備が堅固になったこと、そして北アフリカ、マリ共和国にある AQIM の基地は、この地域全体でのテロ活動のための、発進基地になっていることを認めている。

<http://www.globalresearch.ca/al-qaeda-and-natos-pan-arab-terrorist-blitzkrieg/>

(以下、9/11 Reader の目次解説と、リンクされた 72 篇の論文タイトルは省略する。)